The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『石清水物語』の後日談に示される「不義の子」の可能性とその意義
Author(s)	井, 真弓
Citation	詞林. 2004, 35, p. 77-89
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67517
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『石清水物語』の後日談に示される「不義の子」の可能性とその意義

井　真弓

はじめに

『石清水物語』は、男主人公が女君との叶わぬ恋に悩み、あるいは破局することにより、現実に絶望して出家遁世してしまい、その一方で女君は帝の寵を受けて栄華を極めるという悲恋遁世物語の亜流として位置付けられてきた。しかしながら、男主人公たる伊予守の出家に至る過程や、出家の意図の分析、さらには女君である木幡の姫君の心情描写に着目した物語展開の解釈によって、本物語は単純な悲恋遁世という話型ではなく、むしろ一種の恋愛成就ともみなすことのできる内容であることを示した。[1]

すなわち伊予守の側から物語を読み解くと、木幡の姫君との恋愛に悩んだ末に自らを想う姫君の真情を知り、心の充足を得、やがて恋愛を肯定したまま来世での一蓮托生のために出家に至るという物語展開になっている。このように伊予守は最終的に人生の目標を見つけ、現世における妄念からの解放とも言うべき状態となっていることから、伊予守に関しての物語は決着を得ていると考えられよう。その一方で、同じく重要人物である木幡の姫君についてはどうであろうか。

物語内で姫君は、様々な事象に遭遇するたびに「(心)憂し」「うたて」と画一的な感情のみを抱いているように描かれている。これは姫君の物語が従来考えられていたように「女の幸の物語」を描出したかったわけではなく、むしろ姫君の身に起こるほとんど全ての出来事、しかも本来は幸福のきっかけとなるはずの事象が、姫君にとっては不幸を呼ぶ存在として機能していることを意味している。本物語を姫君の側から読み解くと、現世における苦悩に満ちた人生を、伊予守との一蓮托生の誓いによって来世にて救われるという救済譚が描かれているものと考えることができよう。[2] それ故に本物語における姫君の描写は、物語の全編を通して嘆きに満ちている様子が示されているのであり、伊予守が出家したことを聞き、深い悲しみにくれる姫君の描写をもって物語は結末を迎える。この時、姫君は帝に強奪されたことによる嘆きも冷めやらぬ上に、伊予守の出家を知って自らの人生に対して

さらに深い嘆きを抱いている。この時点では姫君に関してはわずかの救済も示されておらず、物語の結末はいささか突然の感をぬぐいきれない。そして、物語の掉尾には、木幡の姫君を始めとする登場人物たちの後日談が据えられているのだが、そこでは、木幡の姫君は帝の一の宮を出産し、皇后になる可能性があることが示唆されている。これは、直前までの物語の流れに対してさらに唐突であり、あたかもとってつけたような幸福な結末であることから、読者にとっては違和感を感じる部分であると同時に、後日談において表面的に語られる内容の背後に何らかの意図や効果が隠されている可能性がある。本稿では、物語の掉尾に記された後日談を分析し、現在までに明らかになった物語構造との関連を総合的に評価することによって本物語のもう一つの「あり得べき姿」を考察する。

一　『石清水物語』の後日談の解釈

最初に、『石清水物語』の後日談の全容を吟味し、物語内における位置付けを確認する。後日談においては、主人公である伊予守と木幡の姫君に加えて、按察使の君と秋の中納言の物語後の様子が描出されているが、このうち、按察使の君および秋の中納言の後日談と、伊予守および木幡の姫君の後日談との間には、明らかに表現上の差異が見受けられる。まず、伊予守に対して恋心を抱いていた按察使の君の後日談を検討する。

> 按察使、このこと（＝伊予守の出家）を聞くに、うつつの心もせず。ひとへ心にて、よきこともあしきことも、物を一に思ふままに、（伊予守が）一年の世の乱れに（東国へ）下りしをだに、あながちに嘆きまどひし心に、「この世には今は見まじきよ」と思ふに、臥し沈みて、うつつともおぼえず。「例よりもあはれにこまやかなりし（伊予守からの）文は、かかるべくてなりけり」と思ひ合はせらるるに、悲しきよりほかのことなかりけり。
>
> （一五二～一五三頁）

この部分では、「うつつの心もせず」「うつつともおぼえず」と二度にわたって用いられている表現からも分かるように、按察使の君にとって伊予守の出家は極めて衝撃的であったことが強調されている。また、「この世には今は見まじきよ」「例よりもあはれにこまやかなりし文は、かかるべくてなりけり」という部分からも、按察使の君の悲嘆、絶望感が露わになっていることが読み取れ、さらにかつての伊予守の東国下向の際に抱いた心情を踏まえることによって、この悲嘆の強さをより一層強調させている。このような登場人物の心内に深く踏み込んだ表現は、後日談以前の本文における按察使の君の描写[3]と同様の文章表現と考えることができる。すなわち按察使の君に関しては、本文同様に物語の展開および按察使の君の心内を把握している立場の人物による語りとい

う形式になっていることが確認できる。

次に秋の中納言の後日談を検討する。

（秋の中納言は）やんごとなくなりたまふにつけても、この尽きせぬ御心の内の物思はしさ（＝木幡の姫君への思い）ばかりぞ、やむ世なかりける。かかるめでたき御仲に、いかなりし宿縁にて、さる迷ひのありけんと、前の世ぞ知らまほしきや。「いとどあるまじきことぞ」とは、心を戒められけれど、（木幡の姫君を）思ひ初めにし心の色は失せやらで、ともすればうち嘆かるる大将（＝秋の中納言）の御心の内も、年月に添へて、今かくのみなりゆくを、「いかさまにせん」とおぼしわびて、「鹿島（＝伊予守）が類にやなりなまし」と心強く思ひ切りてし心のほど、うらやましくおぼさるれど、一方ならず捨てがたきほだし強くて、背きやらぬほどに、官位も身に余るまで昇りたまひけん。（一五三頁）

秋の中納言の場合も、異母妹である木幡の姫君への尽きぬ思いに対して「いとどあるまじきことぞ」「いかさまにせん」と時には自らを戒め、時には苦悩する姿、そして姫君への思いを断ち切り出家を遂げた伊予守を「鹿島が類にやなりなまし」と羨ましく思う姿に、按察使の君の場合と同様、秋の中納言の心内が読者に対して明示されている。また、「かかるめでたき御仲に、いかなりし宿縁にて、さる迷ひのありけんと、前の世ぞ知らまほしきや」と草子地という形で語り手の揶揄めいた感想が混入していることが確認できる。

このように、按察使の君と秋の中納言に関しての後日談の部分は、物語の内容を踏まえ、彼らの心内を知り得る立場、すなわち物語の内実を全て見通す語り手としての立場で語られており、これは本文全体における語り手と同一であることが分かる。

これに対して、伊予守の後日談においてはどうであろうか。

「かの山深く入りにし人（＝伊予守）も、年々積もりて、願ひのごとく、九品の上の品に定まる。同じ蓮の望みも空しからざるべけん」とぞ、本にははべるめるとかや。（一五三頁）

後日談における伊予守の記述は極めて短く、按察使の君や秋の中納言の場合とは異なり、その心内は一切描かれていない。また、功徳を積んで願い通りに九品の上品に定まったとの記述があるが、九品の上品とは生前に積んだ功徳によって決まることからも、伊予守はこの時点では既に往生していることが確認できる。このように後日談の中でも伊予守の部分だけはかなりの時を経た内容であることから、末尾の「本にははべるめるとかや」という記述はこの部分のみを修飾しているものと考えることができよう。すなわち、この伊予守の部分の後日談の語り手は、これまでのように物語の全てを見通す語り手としての立場ではなく、伝聞的かつ客観的な視点として描かれていることが分かる。

さらに、以下に示す木幡の姫君の後日談では、

（木幡の姫君の）御宿世かしこく、報よき人にておはしければ、いまだまうけの君おはしまさで、（帝）「いかにいかに」とおぼしめしけるに、故宮（＝中務宮）の折もさることものしたまはざりしに、いつしかただならぬ御気色にて、今上の一の宮生み出でたてまつらせたまひぬれば、「めでたし」とののしられたまふ。相違なき后の宮なれば、物知り勘へ申したりけることは、今ぞ大臣はおぼし合はせけん。（一五二頁）

男子に恵まれなかった帝との間に一の宮を出産し、やがて皇后になる可能性があることが示唆されているが、この文章中では姫君の心内は一切描写されておらず、それどころか「事実」のみが淡々と記述されており、極めて客観的・第三者的な表現となっていることが分かる。さらにこの後日談における姫君の「御宿世かしこく、報よき人にておはしければ」という形容は、それまでの物語内で語られてきた姫君の人生の軌跡とは全く相容れない内容なのである。

本物語においては、姫君の心は何によっても満たされることがなかった。そして姫君自身が自らの境遇の不幸を「憂かりし夢を見重ねたまひし契りも心憂く、前の世恨めしう、返す返すも思ひ知られたまひながら」（一二七頁）、「色々に憂きことをのみ見重ぬる身の契り心憂く」（一四〇頁）と、繰り返し前世からの因縁と把握しているにも関わらず、この後日談の部分ではあたかも姫君の人生が幸福であるかのような、姫君の真実の姿とはかけ離れた形容がなされており、この部分の記述がそれまでの物語の全てを見通す立場の語り手とは異なり、姫君の人生を表面的にしか把握していない人物の立場で記述されていることが分かる。

これらの点から、後日談内の伊予守、そしてとりわけ木幡の姫君のその後の人生について記述された部分は、物語の他の部分や、秋の中納言と按察使の君の後日談の部分とは、一線を画した表現となっており、特に語り手の立場に大きな差異があるものと考えられる。秋の中納言や按察使の君の後日談においては、他人には知り得ない当人達の心情が詳細に描出されており、物語本文と同様に、全てを見通す立場の人物が語っている体裁になっている。これに対して木幡の姫君の後日談部分では、姫君の感情はおろか直接の姿や行動も一切記されておらず、あくまである女御の記録といった形態になっていることから、物語の全てを見通す立場の人物によって語られたのではなく、むしろ姫君を直接は知り得ない人物による伝聞というような形で描かれていると考えることができる。

読者としては、伊予守の出家の後に木幡の姫君がどのように人生を過ごしたのか、特にその心情や行動に興味があるのであるが、この後日談ではその部分は一切語られないのである。それでは、このように語り手を変更してまで客観的に記

述された木幡の姫君の後日談とは一体どのような意図のもと、描かれたのであろうか。

二　『石清水物語』の隠蔽された物語構造の解明

前章において、後日談における木幡の姫君の描写の部分は、物語の内実の全てを見通す立場の語り手によって説明されているのではなく、むしろ姫君を直接には知り得ない立場の第三者による客観的な記述として描かれていることを示した。このような立場の語り手を用いた理由として、記述された内容が「一般的に知られた事実」であるが、「当人しか知り得ない真実」ではないという点を指摘することができる。その典型的な例は、先に示した「御宿世かしこく、報よき人にておはしければ」という形容である。この形容は、姫君を身近に知り得た人物によって記されたものであるはずはなく、むしろ「鄙で育ちながら帝に迎えられて一の宮を出産することになった幸運な女性」に対する根拠のない賛辞、形容であると考えることができよう。このように後日談において姫君が幸せな人生を送ったかのような表現がなされていたため、あたかも姫君の物語がサクセスストーリーであるような錯覚を抱かせ、今日まで本物語の内容が誤って解釈されていたと考えられる。

「御宿世かしこく、報よき人にておはしければ」という表現が姫君にとっての真実を表していないということは、その直後に記される姫君が生んだ帝の一の宮が、果たして真実帝の子であったのだろうか、という疑問、さらに言えば、姫君の生んだ子が伊予守との間の「不義の子」である可能性を読者に提示していると考えられる。むろん、この後日談部分は、姫君の心情や内実を知り得ない立場の語り手によって記述されているため、不義の子であるという断定は不可能である。しかしながら、その可能性が否定されていないのもまた事実であり、むしろ後日談内での意図的な語り手の変更といった表現手法によって、姫君の生んだ子が帝との間の子ではないという可能性を示唆している。

『石清水物語』においては、従来は伊予守と木幡の姫君との間に子は生まれていないと考えられてきたが、これは不義密通をテーマに持つ中世王朝物語においては極めて異例なことである。本物語での伊予守と姫君は、私通を犯したことに対する罪の意識やそれに伴う苦悩が完全に欠落しており、これは不義の子の誕生という重要な要素が欠如し、二人が罪の露顕を恐れる展開は本文中では表れないことに起因していると考えることもできる。[4] また、このように二人に子が誕生しないことの理由を、神田龍身氏は「貴族と武士との差異を根源から否定する混血児の存在はなんとしても認め得なかった」ためと考えている。[5] しかしながら、今回の検討によって本物語では、伊予守と姫君の間には子が生まれ、しかもその子は帝の一の宮として、あるいは将来の春宮ともなるべき運

命を担っているという可能性が新たに表面化してくるのである。

以上、木幡の姫君と帝との間に生まれたとされる一の宮が、その実伊予守との間に生まれた「不義の子」である可能性について、後日談部分の構造と表現手法の分析から論究した。さらに、本物語内における設定・伏線から、「不義の子」の可能性について検証を行う。

伊予守と木幡の姫君の恋愛描写におけるいくつかの類似から、姫君の人物造型を『源氏物語』の女三宮に求める指摘[6]がある。また一方で、姫君が伊予守よりも五歳の年長であり、幼少時、身近に育てられたという設定から、藤壺との関連を指摘する論[7]も存する。すなわち、伊予守と木幡の姫君との恋愛には、『源氏物語』における光源氏と藤壺の密通、柏木と女三宮の密通が基本的な物語構想として取り込まれていることは明らかである。源氏物語におけるこの二組の密通では、いずれも不義の子である冷泉帝および薫が誕生するわけだが、その出生の秘密を巡っての光源氏や柏木の懊悩、藤壺や女三宮の畏れと出家、さらには不義の子である薫自身の我が出自に関する悩み等が、物語において非常に重要な要素となっている。このことから『石清水物語』での伊予守と木幡の姫君との恋愛においても、「不義の子」が誕生するという可能性は読者にとって容易に想像し得るものであると言うことができよう。

ここで木幡の姫君の入内決定以後の物語の展開を考えてみる。姫君の入内は、姫君が父左大臣との邂逅が叶った翌年に、決定された。当初は「八月の彼岸のほど」に予定されていたが、秋の中納言の正妻女二宮の懐妊・出産により入内準備が間に合わず「十月」に延期される。姫君の入内が決定したことに並行して、伊予守は姫君との恋愛成就のために石清水八幡神に祈願をするのだが、これに呼応するがごとく、姫君の養母である木幡の尼君が発病し、見舞いのために左大臣邸から木幡へと里帰りしていた姫君と二度の逢瀬を実現する。その後、入内準備の進む「九月の末」に左大臣の夢に姫君は私通を犯しているため、入内を取り消すようにとの八幡神の神託があり、入内は取り消されることになる。左大臣は悩んだ挙げ句、年老いた中務宮と結婚させることを決め、「十月二十日」にその儀を取り行う。中務宮の元に嫁いだ後、木幡の尼君の死去、左大臣の関白引退等の出来事があるのだが、「とかく過ぐるほどに、大将殿（＝秋の中納言）の若君、五つになりたまふ」（一三二頁）と、五年の時が経過した頃に、中務宮の病状が前妻の死霊により悪化し、姫君は左大臣邸に戻ることになる。「長月の十四日」に左大臣達が春日詣でのために留守にした合間に、伊予守は姫君との四回目の逢瀬を実現し、来世での一蓮托生を約束することで、出家の決意を固める。「かくて十月になりぬ。五日の月かすかに出でて」（一三七頁）と、十月五日の宵に中務宮の危篤の報が入り、姫君

は中務宮邸から遣わされたという車に乗った後、行方知らずとなる。五、六日後、この計らいが帝によるものであり、姫君は帝の甚寵を受けていることが知れる。伊予守は姫君が帝の寵愛を受けていることを聞くと、出家の意志を一層固め、「二十日余日の月傾きて」（一四六頁）と二十日頃に高雄で出家を遂げることとなる。

このように時間の流れを見ると、「姫君と伊予守の二回の逢瀬から入内取消、中務宮に嫁ぐまで」（期間A）と、「中務宮の病状悪化に伴い里帰りをし、伊予守との最後の逢瀬を持ち、帝に強奪されるまで」（期間B）の二つの期間に集中して、姫君の身に様々な出来事が連続的に起きていることが分かる。特にBの姫君と伊予守との最後の逢瀬の後、伊予守が出家を決意、そのすぐ後に帝による強奪が行われるという物語展開は、不義の子の誕生という可能性を維持しようとする物語の論理からの要請を受けてのものであると考えることができる。

まず、帝の行動について検証すると、期間Aでは、帝は姫君の入内を心待ちにしていたために、その入内が取り消されたことに対しての落胆が大きいことが以下の部分に示されている。

内には、（木幡の姫君の）かたちめでたきよし聞きおかせたまひて、（入内が）延びにしをだに、（帝）「心もとなし」と仰せられけるに、にはかにかかること（＝入内取消）の聞こえありて、中将の内侍して、ことのよし忍びて奏したまへば、（帝）「本意なく口惜し」と、おぼし嘆かせたまふこと限りなし。（一一八頁）

そして何としてでも姫君を手に入れようと強奪する機会を虎視眈々と窺う帝の姿が、以下の部分に描かれている。

…内にても、（中将の内侍）「世の末と言へど、珍らかなる人（＝木幡の姫君）も出でものしたまひけるよ。『限りなし』と言へど、なほ言の葉足らずこそ」など奏しおきけるを、（帝は）引き違へられて、口惜しきことにのみおぼされければ、ことの折節にはなほおぼし絶えず、「いかで見ん」の御心も絶えざるべし。（一二六頁）

やがて期間Bにおいて、帝はようやく姫君の強奪を実現させるのだが、期間Aからは少なくとも五年以上の時の経過が存在しており、その間に帝が何らかの行動を起こすことがなかったことを考えると不自然である。物語の中ではこの時期に強奪を決行した理由を以下に示すように記しているが、そもそもこの時期に中務宮の死が訪れること自体が、物語の論理からの要請と考えることができよう。

…（中将の内侍）「年頃、『（木幡の姫君の）御かたちめでたし』と（帝は）聞きおかせたまひて、さばかり心もとなしと待ちわびさせたまひしを、御参りの空しくなりにしことを口惜しくおぼしめされしに、『宮（＝中務宮）のかく頼みなくおはします』と聞かせたまひて、（帝）『も

し（中務宮が）はかなくなりたまひなば、（木幡の姫君は）穢れにも籠もり、さまなども変へさせたまひなん。さらぬ先にたばかれ』と、責めさせたまへれど、我々の御ことならねば、『うしろめたくはいかが』とて、仰せごとを背きはべりしかば、（帝は）知らさせたまはで、御心とかまへ出ださせたまへる。…」　（一三九頁）

本物語の主題が伊予守の出家に至る過程であることを考えると、伊予守が出家を決意した後に姫君が帝に強奪される必要性はないのである。あるいは後見としての伊予守の義務感を満たすためと考えられなくもないが、姫君が真に後見を必要とするのは帝に迎えられた後であると考えられ、不適当である。また、本物語が通常の悲恋遁世物語のように「女の幸」を描出しているわけではないことを考慮すると、帝による強奪の物語上の理由として考えられることは、後日談にて示唆されるように、伊予守との間の不義の子が帝の子として誤解され得る状況を作り出すためであったと考えることができよう。

逆に、帝による強奪が伊予守との逢瀬より前に起こった場合はどうなるだろうか。その場合、伊予守が逢瀬を実現するためには内裏に忍ぶ必要が出てくるわけだが、その実現は一介の武士である伊予守にとっては極めて困難であると同時に、そのような逢瀬は紛うことなき密通という伊予守の罪になることが問題となる。本物語では、先の研究において指摘したように、伊予守と姫君との私通の罪は、様々な誤解等によって表面には一切現れない構成となっている。[8] 木幡の姫君が一旦中務宮に嫁いだ後に帝に迎えられるという物語展開は、過去の伊予守の私通の罪を消滅させるという働きを持っていると同時に、不義の子という罪をも消滅させる効果を持っているのである。また、伊予守との最後の逢瀬の後に姫君が帝によって強奪され、その後、中務宮が死去するという展開によって、たとえ帝の一の宮とされる子が帝の子でない疑いが生まれたとしても、その場合の真実の父親は中務宮としか考えられず、伊予守の姿が現れることはないのである。

このように物語を分析すると、特に期間Bの展開は、伊予守との間に「不義の子」が存在する可能性を残しつつ、その罪を伊予守に及ばなくするという働きをしていることが分かる。さらに、期間Aにおいて一旦決定された入内が取消になった上で中務宮に嫁いだことを含めて、全てが本物語の隠されたストーリーである伊予守との間の「不義の子」の存在と罪の隠蔽を実現するために構築されたものであると言えるのではないだろうか。

後日談において木幡の姫君の懐妊を表す部分の直前には、「故宮の折もさることものしたまはざりしに」との説明が付されている。以下の本文に示されるように、姫君の前夫である中務宮は姫君との間に子が誕生することを切に願っているにもかかわらず、三年という長い年月が経ってもそれが叶う

ことはなかった。

この中務宮は、御子あまた持ちたまはず。…男君の一人ものしたまひけるは、幼くて失せたまひにける。（中務宮）「この（＝木幡の姫君）御腹にさること（＝子供が生まれること）あらば、いかにうれしからん」と、常は聞こえたまへど、心もとなくて三年にもなりぬ。（一二七頁）

その後、中務宮との結婚生活は五年に及ぶのであるが、それでも懐妊はなかったことを引き合いに出した上で、帝の一の宮の懐妊について後日談では「いつしかただならぬ御気色にて」と表現している部分に、中務宮との結婚生活をうまく引用し、「早すぎる懐妊」という雰囲気を描出しているのである。

姫君はまた帝に迎え取られた際も、泣くことにより帝を拒み、姫君自身「なほ飽かぬ御ことあるにや、慰む方なき御心には、かしこき御ことも何ともおぼされず、身の憂きよりほかのことなかりけり」（一四一頁）と、帝の寵愛を受けることを幸福と認識していないのみならず、姫君がわずかでも帝に心を開く描写は物語内には全く存在していない。それにも関わらず、後日談においては唐突に懐妊・出産の事実のみが簡潔に描写されるのであるが、これは読者に対して意図的に違和感を抱かせ、子の出生について思いを巡らせさせようという意図を読み取ることができよう。さらに、先に述べたように木幡の姫君の人物造型に藤壺や女三宮の影響があることや、姫君の後日談部分の語り手が意図的に変更されていること、物語内に姫君が帝を受け入れる描写が一切ないこと等を考え合わせると、姫君が生んだ子は帝の子ではなく、伊予守との間にできた子であるという可能性が容易に想像できるのである。

このように考えると、姫君と帝の間の子が伊予守との間の不義の子であるという解釈はあり得る真実の一つとして、読者にとって十分想像し得るということを意味している。特にこの後日談部分に不義の子の存在を連想させ得るような手がかりがいくつもちりばめられていることを考慮すると、作者は意図的に「不義の子」の可能性を読者に提示しているように考えられる。

三　中世王朝物語における「不義の子」の存在

以上の分析により、本物語では木幡の姫君が生んだ一の宮は、実は伊予守との間の「不義の子」である可能性が残されていることが分かる。しかしながら、物語内でそのことがはっきりと示されるような描写は一切なく、全ては状況証拠に拠っているのである。このような表現手法は、不義密通を扱う中世王朝物語において不義の子の出生が明らかに示され、物語の主題になっている点とは大きく異なっている。これは、血脈と置かれた立場の違いに起因すると考えられる。以下に、不義の子を扱った他作品での不義の子の立場を示す。

『あきぎり』では三位中将と入内前の三条の姫君との間に生まれた姫君が、また『我が身にたどる姫君』では四組の密通によって生まれた姫君達が、やがて春宮等と婚姻することによって帝の血脈に組み入れられていくことになる。その他不義の子が女子である物語は多くの例が存するのだが、一方で本物語同様、不義の子が男子である物語としては、『狭衣物語』での狭衣大将と女二宮、『夢の通ひ路』での一条権大納言と梅壺の女御との間に生まれた若君が帝の子として甚寵を受けるという例、および『源氏物語』での光源氏と藤壺、『苔の衣』での兵部卿宮と東宮妃たる苔衣の姫君との間に生まれた不義の子である皇子が、後に帝あるいは東宮となる例がある。本物語と同じように不義の子が春宮あるいは帝として立つと設定されている物語は『源氏物語』と『苔の衣』のわずか二例である。しかしながら、これらの物語においては、不義の相手である光源氏や兵部卿宮は、帝に極めて近い血統を有しており、あるいは帝となっても不自然ではない人物として描かれている。それ故、生まれた不義の子は本来の血統をもってしても帝の地位を襲うことはさほど不自然ではなく、当時の時代相においては著しい抵抗感はなかったことが想像される。

これに対して『石清水物語』では、一の宮の実父の可能性がある伊予守は、父親である常陸守と鹿島なる女との間に生まれた人物とされており、その子が帝の地位を襲うことは、当時の社会通念としてはあり得ないことであったと考えられる。確かに、伊予守の家系は、遠く帝の血筋に連なるものと設定されている[9]が、現在の伊予守は身分の卑しい武士と見なされており[10]、伊予守の子が春宮となるなどということは、貴族社会においては「あってはならないこと」なのである。

本稿では、木幡の姫君が生んだ帝の一の宮が、伊予守との間の「不義の子」であったという可能性を提示しているのだが、物語内にみられる手がかりはいずれも間接的な状況証拠であり、不義の子の存在を示す直接的な描写は全く存在しない。それ故従来は、『石清水物語』においては不義の子は存在しないと考えられていたのだが、前述したように武士である伊予守の子が春宮となるということが当時の社会通念上あり得ないことであった以上、物語においてもそのことは表には出せなかったものと考えられる。このため、本物語では不義の子の存在が巧妙に隠蔽されているのであり、さらには、一の宮の出生をもって姫君の物語が唐突な終わり方をしていることは、この理由によるものであろう。木幡の姫君の物語を出産以降も続けるということは、すなわち出生の秘密に触れざるを得ないことを意味しているのだが、本物語での出生の秘密はたとえ架空といえども禁忌と言うべき内容であることから、木幡の姫君の懐妊・出産についても本文中で示すことはできず、後日談という形で、さらに語り手を変更するという技法を凝らした上での記述となったのであろう。

四　「不義の子」の存在を踏まえた物語の新解釈

以上、『石清水物語』における「不義の子」の存在の可能性について論考した。続いて本章では、不義の子の存在を踏まえた際に、本物語の解釈がどのように変化するかについて検討を行う。

本物語における姫君の人生は、決して従来言われてきたような「女の幸の物語」ではなく、むしろ常に嘆きに満ちたものであることを先の研究において指摘した。[11] そして今回明らかになった不義の子の存在は、姫君にとっての物語展開をさらに底なしの苦難へと導くものと考えられるのである。

一の宮、実は伊予守の子を生んだ木幡の姫君には、藤壺や冷泉帝にとっての光源氏のような最大の後見役になり得るべき伊予守もおらず、帝の寵愛を受けていた兵部卿宮女（梅壺の女御）や関白の孫娘である左大臣の女御から寵を奪い、男皇子を出産したことからも、『源氏物語』桐壺巻における桐壺更衣のように他妃による妬みが生じてくる可能性も十分に考えられ、今後姫君の宮中生活がさらなる苦難に満ちたものになることを示唆している。

このような現実社会における苦難に加えて、『源氏物語』における藤壺や女三宮は傍目には早すぎるくらいの出家によって、密通や不義の子の出産といった罪からの逃避・贖罪を行い得た。特に藤壺は、何度も逢瀬を迫る光源氏を拒み通すといった強い意志の力を有しており、出家に際しても光源氏が情に訴えて翻意を迫るにも関わらず、自らの固い決意によって剃髪・出家を成し遂げている。それに対して木幡の姫君は、本文内で描かれていたように迫り来る苦難に対して自ら能動的に行動して対処することを知らず、常に周りの状況に流されるままである女性として描かれていることから、出家という決心をしても実行に移すことができる人物ではないと考えられる。また、来世において同じ蓮の上に生まれ変わるために聖衆を伴って姫君を迎えに来るという伊予守の誓いの最後に「面変はりせさせたまふな」（一四三頁）と、姫君の出家をとどめる言葉があることからも姫君は出家をすることができないのである。このように姫君は自らの罪や置かれた苦境から逃れる術もなく、頼るべき庇護者も相談する相手もおらず、ただ思い悩むのみでその後の長い人生を送ったであろうことが想像できるのである。ここにおいて、「主体性がなく人形同様である」[12]と物語の登場人物としては魅力に欠けた人物であるとされていた木幡の姫君の性格が、逆にその後の姫君の辛い人生を読者に分かりやすく想像させるという効果を持っていることが分かる。

このような姫君のその後の苦悩に満ちた人生を、最も象徴的に示しているのが、帝に迎えられた姫君が伊予守の出家を知った際に心中にて詠じた歌「身の憂さを嘆く嘆くも世に経ればなほ憂きことの数ぞまされる」（一五二頁）であろう。こ

の詠歌は、これまでの姫君の人生が苦悩に満ちたものであったこと、そして、伊予守の出家が、来世での一蓮托生を望むが故のものであることを知りつつも、やはり姫君にとっては辛い出来事であったことを意味しているのだが、それに加えて、帝に迎えられ、やがては一の宮を出産して皇后の位を約束されるという一見幸運な姫君のその後の人生が、その実不義の子の出産、しかもその子が帝の位を襲いかねないという大罪におびえながらの苦悩に満ちたものであることを示しているのである。

おわりに

本稿では、物語の掉尾に記されている後日談、特に木幡の姫君の後日談に着目し、本物語の構造との関連性を踏まえながら、隠された意図について考察した。来世において伊予守によって、救済を得ることができるとされる姫君であるが、現世においては片時も救われることがないばかりか、さらに物語としての結末の後も、不義の子の存在によって、想像できないほどの苦悩に見舞われる運命が示唆されている。ここにおいて木幡の姫君の物語の主題である「現世における尽きることのない苦悩と一蓮托生の誓いによる来世での救済」をより効果的に読者に知らしめ、さらには物語の最後に据えられた伊予守の後日談「かの山深く入りにし人も、年々積もりて、願ひのごとく、九品の上の品に定まる。同じ蓮の望みも空しからざるべけんとぞ、本にははべるめるとかや」（一五三頁）という一文が極めて印象的になるといった効果が得られている。その一方で、本物語において描出されている出家観[13]や、姫君の心情描写における特殊な技法[14]、本稿にて提示した、武士である伊予守の子が春宮になり得る可能性といった、他作品とは大きく異なった価値観、思想が投影されており、中世における物語文学の系譜において、本作が極めて独自性の高い作品であることが示された。

＊『石清水物語』の本文は、『鎌倉時代物語集成　第二巻』（笠間書院）に拠り、表記は私に改めた。

注

(1)拙稿「『石清水物語』における男主人公の心理と物語の論理」（『詞林』三〇・二〇〇一年十月）

(2)平成十五年度全国大学国語国文学会冬季大会（於大阪大学）における口頭発表

(3)後日談以前の本文において、按察使の君の心内が語り手の言葉によって示される一例を以下に挙げる。

…（秋の中納言が伊予守を）異ごとなく誉めたまふを聞くに、（按察使の君は）いともよほされて、下行く水の湧きかへる按察使の君が心の内はなほ静めがたかるべし。この大納言殿（＝秋の中納言）の御方に、幼くより御身近く使ひ馴らしたまへるが、おのづから御覧じ放たぬ折々もある若人にてある、この伊予を見始

めけるより、いかなるにか、そぞろに心にかかりて何も思ひ分くことはなけれど、かたち有様の見まくほしく、明け暮れ見るらん人のうらやましうおぼえて、参りたる折は、世を尽くして目離れなくのぞきゐたれど、思ふ心を知る人なければ、かひなかりけり。（七四頁）

（4）注（1）に同じ。

（5）神田龍身「男色、暴力排除の世代交替―『石清水』『いはでしのぶ』『風に紅葉』―」（『物語文学、その解体―『源氏物語』「宇治十帖」以降―』有精堂・一九九二年）

（6）辻本裕成「『石清水物語』における『源氏物語』の登場人物―鎌倉時代物語論序説―」（『國語國文』六八六・一九九一年十月）

（7）白幡由美「『石清水物語』における人物造型試論―女主人公木幡姫を通して―」（『東洋大学大学院紀要』三七・二〇〇一年二月）

（8）注（1）に同じ。

（9）この常陸（＝常陸守）も、もとのねざしは帝の御筋にて、某の親王とか申しけるが、いかなる乱れにかありけん、東へ流されて、その末々あまたになりにければ、もとの身を変へて、あやしき民の振る舞ひをして、弓矢取るわざを次第につきづくしもてゆくほどに、かかる武士にぞなり定まりたりける。（七頁）

（10）（秋の中納言）「（伊予守が）さまかたちの、人には異なるのみにもあらず、け近きさまのいみじうのみおぼゆるは、げにいかなる前の世のつとめにて、高き家に生まれずながら、かばかり見る目も愛敬づき、よろづにさま殊ならん。『戒の力にや』と思ふべけれど、下れる身と生まれたるは、いかなるにかあらん。『愛染王の、仮に人と現じたまへるぞ』とおぼす。されど、赤く目立たしき御顔には、よそへ苦しや」…（七三～七四頁）

（11）注（2）に同じ。

（12）尾上八郎『校註日本文学大系第五巻』（国民図書・一九二七年）所収『石清水物語』の解題、渡辺竹二郎「石清水物語の二重性」（『長野県短期大学紀要』二・一九五一年二月）

（13）注（1）に同じ。

（14）注（2）に同じ。

（いのもと・まゆみ　本学大学院博士後期課程）